

アクセント辞典の誕生

放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか

メディア研究部 塩田雄大

要 約

- 昭和の初期には、アナウンサーは各地の放送局で個別に採用されており、発音・アクセント上での個人差が非常に大きかった。これに対して、ラジオ聴取者からの不満が寄せられていた。
- 1934（昭和9）年以降は東京でアナウンサーを一括採用することになったが、アナウンサーを養成するための統一的な資料（アクセント辞典）の編纂が望まれた。
- 「標準アクセント」としてどんなものを採用するかについては当時の社会でいろいろな意見があったが、日本放送協会の担当者の間では、実践的な立場から東京語のものを採用することでほぼ合意されていた。
- 放送用語委員会におけるアクセント関連の調査・審議は1936（昭和11）年末から始まり、1938（昭和13）年に本格的におこなわれた。
- 一語一語の審議・決定にあたっては、神保格の提示したアクセント案の占めた役割が大きく、また最終的な選定にあたっては「なるべく一語一アクセントを目指す」という土岐善麿の姿勢が活用されたと解釈できる。
- 第1期放送用語委員会の終了に伴い、複数の委員による一語一語の審議・決定は「カ行」の途中までで中断してしまい、それ以降の部分は日本放送協会側の担当者である三宅武郎が独力で編集をおこなったと推測できる。
- 『日本語アクセント辞典』（1943）は第1期の放送用語委員会の主導で編纂が始められたが、これが1943（昭和18）年に発行されたときには、第2期の放送用語委員会が活動しており、双方の決めた発音・アクセントの間にいくつかの食い違いが見られた。

目 次

I はじめに……………	174	VI 『日本語アクセント辞典』の編集過程	
II 『日本語アクセント辞典』成立以前の状況	174	～放送用語並発音改善調査委員会の審議	
III 『日本語アクセント辞典』成立以前のアクセント参考資料……………	176	に見る～……………	183
IV 『日本語アクセント辞典』編集関係者……………	179	VII ニュース用語調査委員会での議論……………	188
V 「標準アクセント」に関する議論……………	181	VIII 本稿の暫定的なまとめ……………	190

I はじめに

本稿は、日本放送協会で最初に編まれたアクセント辞典『日本語アクセント辞典』(1943(昭和18)年)の成立過程をめぐって考察するものである。

II 『日本語アクセント辞典』成立以前の状況

ここでは、放送用語における発音・アクセントがどのように取り扱われていたのかといったことについて、『日本語アクセント辞典』が刊行された1943(昭和18)年より前の状況を簡単に見てみる。

日本でラジオ放送が正式に始まったのは、1925(大正14)年である。その年の新聞には、次のような投書が載せられている。

「アナウンサーの国なまり
東京放送局のアナウンサー諸君の田舎ツペイ言葉にも困つたものだ『こづらは東京放送局であるます』ぢや東京放送局の其の東京の名前にそむくと言ふもんだ。之は是非共すつきりした箇切れのよい東京弁で願ひたい(以下略)」
「東京放送局へ
講話、童話放送者の多くが中央標準語が話せませんね。日本語を正しく話せる放送者を選んで下さい、子供の為に」¹⁾

このように、開始当初の放送でのアナウンスメントに対して相当手厳しい意見が寄せられている。

アナウンサーの採用は、1934(昭和9)年からは原則として東京中央放送局でアナウン

サーを募集して試験のうえ採用し、一定の期間の教育をしたのちに全国の放送局に配属したが、それ以前は、東京・大阪・名古屋・広島・熊本・仙台・札幌の各放送局でそれぞれおこなわれ、特に決まった教育はなされなかったようである(市川重一(1984))。たとえば、JOBK(大阪放送局)の「アナウンサー採用試験問題」(掲載誌は『調査時報』第三卷第七号、1933(昭和8)年4月発行)は作文問題・筆記問題・朗読問題からなっているのに対して、東京中央放送局の試験問題(掲載誌は『調査時報』第二卷第十二号、1932(昭和7)年6月発行)では、漢字語にフリガナを付ける問題や朗読の問題に加えて、発音に関して意識的に問う問題(たとえば「秩序、葺、越後、人出、汐干狩」を発音させるなど)も出題されており、アナウンサー採用時点での地域差がかいま見える。

また、次のような記録も見られる。この執筆者の土岐善麿は、その後設立される「放送用語並発音改善調査委員会」(本稿では「第1期放送用語委員会」と呼ぶこともある)の委員の1人である。

「ラヂオプレー、ラヂオコメデイなどは、平凡ながらも筋があり、浅薄ながらも内容はあるので、小さくまとまつたものにはなつてゐる。たゞ僕の最も閉口するのは、そこに出る「発声者」のアクセントのひどい方言性だ。もつとも現代の家庭には、都会でもこんなアクセントの若い女性などがゐて、一かど時代性を發揮してゐるのだから、その情景をさながら表現するものとすれば、これでいゝはずだといふことに異存はいへないのだが、ラヂオを通しては、もつと快適な標準語、せめて標準語のアクセントや発音に近いものを選んでほらへないものか。」
(土岐善麿(1931)、太字は原文のとおり)

その後も、全国の放送局でのアナウンスメントには地域的にある程度の違いがあったことが、以下の記述からうかがえる。執筆者の佐藤孝は、当時の日本放送協会に勤務していた用語調査係員（放送用語委員会関連業務を担当）の1人である。

「地方的に見ても東京のJOAKでばかり標準語でやつても外の大阪や名古屋の放送局では、その土地の出身者が多いためその土地の言葉の発音やアクセントでアナウンスしてゐるのが少ない。全国中継などでよく耳にたつことがあるのはそれである。」（佐藤孝（1936））

このような状況のなかで、聴取者からは発音・アクセントに関して具体的な意見も寄せられる。1934（昭和9）年および1935（昭和10）年に各放送局に寄せられた聴取者からの投書には、アクセントに関して以下のようなものが見られる（総務局計画部（1935）（1936）²⁾）。

子供ニュース担当者は標準語使用は勿論アクセントに注意ありたし。

（東京局あて10通）

アクセントの研究希望。

（東京6、小倉、秋田）

米穀—米国 アクセント注意。（東京）

帝国—一定刻 アクセント注意。（東京）

大鼓—大川 アクセント注意。（東京2）

（以上 1934年）

「晴れ」（名詞）の東京アクセントは頭上りならずや。（備考 尻上り「ハレ」なり）（東京）

「何百噸で」が「何百飛んで」と聞ゆ。（東京）

甲府を工夫と言つた。（東京）

「雲」「蜘蛛」の区別CKには出来ぬ人あり。（名古屋）

〔引用者注 「CK」は名古屋局〕

オカザキ（第二上）にあらず、地元のアクセントはオカザキ（平）なり。（名古屋）

（以上 1935年）

このころ、神保格（第1期放送用語委員会の委員の1人）は、アクセントの「ゆれ」として、「午前」「あるいは」「ことに」「もっとも」「世界」「熱心」などに2種類のアクセントがあり、それらに対して「標準」を定めるべきであることを、放送関連専門雑誌の誌上で主張している³⁾。

また先述の佐藤孝は、実際の放送を聴取したうえで非伝統的なアクセントの例を大量に採集して報告している⁴⁾。

放送開始当初には十分なアクセント関連資料が整備されていなかったことについて、当時のアナウンサーの1人である米良忠麿は、1932（昭和7）年に次のように語っている。

「扱て私の云ひたい事と云ふのがもう一つある。前に常識の範囲を定めてほしいものと云ふ事を述べた。正しい読み方に従ふか、通用してゐる（或は通用しかゝつて居る）読み方に従ふかといふ事を定めて貰ひたいと。それにもう一つ附加したい事がある。それは、同時にアクセントも定めてほしいと思ふのである。日本も汗牛充棟もたゞならぬ程に字引はあるが總有る言葉を網羅してそれにアクセントを附したものはない。手近かな例を引いても赤蜻蛉が、aká tomboだか、aka-tombだか分らない〔引用者注 ローマ字は原文のとおり〕。三味線のお稽古さへ音符によらうと云ふ時代に、国語のアクセントが人により所によつて千差万別である等どういふものであらうか。

（米良忠麿（1932））

放送を担当するアナウンサーは、職業人として自身の本来の発音・アクセントを修正する必要があることを訴えていた。当時のアナウンサーの1人である市川重一は、たとえば

以下のような例をあげている⁵⁾。

ユックリ ((副詞))
—私は [ヨックリ] と云つてゐた。
フクジンズケ (福神漬)
—私は [フクシンズケ] であつた。
キシモジン (鬼子母神)
—私は [キシボジン]
コエル (越える) コエル (肥える)
(中略) 私は両方とも中高に言つていた。
トーベン トーベン (答弁)
…アナウンサーは頭高。私は平板であつた。
(市川重一 (1942))

1934 (昭和9) 年に「放送用語並発音改善調査委員会」(第1期放送用語委員会) が発足したが、アクセント辞典編纂の作業はすぐには始められなかった。その理由の1つとして、当時の用語調査係員の1人である三宅武郎は下記のように「アクセントはそう簡単には決められないから」ということを回想してあげている。

「ラジオの聴取者は、上は八十の人から下は幼稚園のこどもまでであるのですから、そのうちのどつちを採つてよいか [引用者注 1つの語に複数のアクセントが用いられている場合のことを指す] ということについては、よほど慎重にとりきめなければなりません。そこで、アクセント辞典の編集ということがいちばんあとまわしになつたわけであります。ようやく他の仕事が一段落つきまして、いよいよアクセント辞典の編集ということになりましたので、ア行のアの部からはじめて委員とアナウンサーとの合同研究をはじめました。
(三宅武郎 (1952))

その後も、アクセント辞典がきちんと整備されていないことについて、当時 (1939 (昭

和14) 年) の社会状況を反映して次のような指摘 (国語協会編集幹事である石黒修による) が見られる (ただしこの指摘にはやや事実誤認があり、この発言当時にはすでに神保格・常深千里『国語発音アクセント辞典』(1932) は刊行されていた (後述))。

「外には、盟邦満州国が日本語を国語とし、中国が第二国語とし、又海外各地に進出してゐる今日発音辞典さへ出来てゐないことは、国家の体面に関する。又内には、国民精神の統一、総動員のやかましく唱へられる時、確とした標準日本語を持たないのはまことに遺憾なことであり、これが制定は実に刻下の急務でなければならない。」

(石黒修 (1939))

III 『日本語アクセント辞典』 成立以前のアクセント参考資料

アナウンサーの養成にあたっては、『日本語アクセント辞典』(1943) が刊行される前は、神保格・常深千里『国語発音アクセント辞典』(1932) がアクセントの指導に使われていたようである (菅野謙 (1979) p.265)。ただしそれ以外にも、アクセントを掲載した国語辞書である『新辞海』(1938) や、放送用語委員会での決定事項 (発音・アクセントを含む) をまとめた『放送用語備要』(1940~1944) もアナウンサーによく用いられていた⁶⁾。

ここでは、こうしたアクセント関連参考資料について概観する。

- a. 山田美妙『日本大辞書』(1892~1893)
大槻文彦『言海』(1889~1891) にアクセ

ント表記がないことを不満に感じた山田美妙が、自分の辞書観に基づいて作ったアクセント表示付きの国語辞書である（『国語学研究所事典』（明治書院，1977）。掲載されたものは美妙自身のアクセントであるため、複数の「ゆれ」ているアクセントの処理に関する苦心がなく、その点に関しては比較的楽だったのではないかと三宅武郎（1969）は語っている⁷⁾。とはいうものの、アクセントを明示した体系的資料としての価値（実用的・歴史的）は非常に大きい。

b. 高橋龍雄編『国定読本発音辞典』（1904）

この辞典に関しては以下のように記述されている（『辞書解題辞典』（東京堂，1977），筆者は現物未見）。

巻頭に国語の発音と文字について略記し、本文には国定小学読本中にある語と、それ以外の語で比較的参考になる語を収録してある。

c. 柴田猛猪・近藤久吉『ローマ字索引 国漢辞典』（1915）

この辞書には、次のような注記が見られるという（山田忠雄（1981）p.770から再引用，現物未見）。

1. 東京語を標準として、アクセントの特に明瞭なるものには、索引中のある箇所〔筆者注 母音の肩〕に'印を附してこれを示せり（山田氏の日本辞典、高橋氏の発音辞典その他に依る）。
2. '印なき語は、主としてアクセントの不明なるものなれども、中には全然アクセントのなき語なるが故に附せざるもあるなり。
4. 外来語には「日本語としてのアクセントと原語としてのアクセントと相違せるもの甚だ多し。これ等は双方に'印を附して、その異同を

示せり。〔引用者注 数字「4.」は引用元原文のとおり〕

ここでの「山田氏の日本辞典」は美妙の『日本大辞書』，「高橋氏の発音辞典」は高橋龍雄編『国定読本発音辞典』を指すものと思われる。

d. 神保格・常深千里『国語発音アクセント辞典』（1932）

アクセント専門の辞書としては日本初のものである。「ラジオの普及率が10%前後であった時期（昭8・3末11.1%）に、東京語に習熟していない全国の国語教員を主な対象として、話し言葉の統一、発音統一を目指した辞書。国定教科書の語彙および中流階級の生粋の東京人が家庭内また社交上頻繁に使用する言葉2万7,000語について、東京の発音（音韻とアクセント）を示し、詳細な解説を付けている。」（『日本辞書辞典』（おうふう，1996），当該箇所は菅野謙執筆）、「常深が昭六・七死去のため志村繁隆が協力」（『辞書解題辞典』（東京堂，1977））といった記述が見られる。元になる原稿は常深千里が書き、最初は三宅武郎（日本放送協会に勤務していた用語調査係員の1人）との合同出版も提案されたが三宅は辞退し、結局は神保格が校閲を担当した⁸⁾。

なお、この『国語発音アクセント辞典』は、冒頭にも示したとおり日本放送協会でのアナウンサーの養成にあたって使われており、協会でその後に編纂される『日本語アクセント辞典』の編集にあたって最も重要な参考資料の1つとして扱われているという（菅野謙（1979）p.265）。

e. 『大辞典（平凡社）』（1934～1936）

公称70万語掲載で、このうち約5万には、傍線でアクセントを表示している（『日本辞書辞典』（おうふう、1996））。このアクセントを付したのは、佐藤孝（日本放送協会に勤務（1934～1943年）していた用語調査係員の1人）である⁹⁾。

f. 吉沢義則編『アクセント表示 新辞海』（1938）

「五万五〇〇〇語 五十音順。通俗辞典としてはじめてアクセントを字の右に線を施して表示した。担当は日本放送協会・三宅武郎で、巻頭にアクセントの話六頁を付す」（『辞書解題辞典』（東京堂、1977））と記述されている。三宅武郎が採集してきたアクセントカードを編集担当者が原稿に転記したのだが、誤植が多いことを三宅はやや後悔している¹⁰⁾。

g. 日本放送協会『放送用語調査委員会決定語彙記録（一）（二）』（1939）（1940）

放送用語並発音改善調査委員会において1934（昭和9）年1月から1939（昭和14）年4月の間に審議された結果をもとに、読み方が決定された語彙およそ1600語について、50音順にまとめた資料である（謄写印刷、非売品）。この中には、読み方に加えてアクセントについても決定した語が多数含まれており、こうした語には○印が付けられている¹¹⁾。書名のとおり「語彙記録」ではあるが、全国各局のアナウンサーが頼りにして使用したものである（日本放送協会放送史編修室（1965）p.428）。

h. 『基本動詞アクセント表（稿）』（1939）

「放送用語並発音改善調査委員会」の議題であるが、大部であるためかNHK放送文化研究所には製本された形でも残っている。「昭和18年の「日本語アクセント辞典」のもととなるもので、動詞だけ（約1,400語）をとりあげて、そのアクセントを検討したもの」と記述されている（西谷博信（1965））。現物を見ると、単純動詞のほかにその名詞化形のアクセントも一部載せられている。

i. 平山輝男『全日本アクセントの諸相』（1940）

方言の研究書であるが、「はしがき」に次のような記述がある。

「本書が東京アクセントに多くの紙面を費した事、特に語例を割合多く挙げた所以は地方の読者で『アクセント辞典』を始め、斯学関係書籍を入手してゐない方々の便宜を思つてである。国定教科書に出る語の中、一般的なものはなるべく之を収録した、特に動詞・形容詞に於てさうである。従つて小アクセント辞典の役にも立つ訳である。」

巻末に掲げられた「東京アクセントの語例」には、名詞（音節数別）・動詞・形容詞・副詞に分類された語群別にアクセントが示されている。総計100ページ以上の記述である。

j. 日本放送協会『同音語類音語』（1941）

放送で使われることばに加えて国語辞書類から単語を抽出し、同音語（約8,700語）および類音語（約43,000語）について辞書形式でまとめた資料である。巻頭に「本書は曩に放送用語並発音改善調査委員会の審議を経たるものなり」と示されており、凡例に次のような注記が見られる。

「各語のアクセントは、近刊予定の『放送アクセント辞典』と大体一致させた筈ではあるが、場合によつては編纂主任個人のものに従つた所もある故、之とそれとは或は相違してゐる点があるかも知れない。それらは他日訂正の筈であるから、本書を利用される方々もその補正に協力されんことを希望する。」

実際の放送において同音語・類音語を用いざるを得ない場合に、アクセントによってこれらを区別するために編集された実務的資料である。

この書について三宅武郎(1952)には「千ページに近い大作で、しかも佐藤さん[引用者注 用語調査係員の佐藤孝のことを指す]の独力の結集です」という記述がある。

k. 寺川喜四男『標準 日本語発音比較辞典』(1941)

台北・興南新聞社。前書きにあたる部分には、「台湾・朝鮮・満洲・蒙古・支那・南洋などに於て日本語の標準音を学ばんとする人や、これを教へんとする人のために役立たせようとして編纂したものであるが、ひとり外地人や外国人のためだけでなく、また日本内地に於て東京標準語の発音を学ばんとする人や、これを教へんとする人の参考にも資するために編纂したものである。(中略)本辞典に採録した語数は無慮四万を超えるのである。(中略)本辞典に示した語彙並にその発音は、いふまでもなく東京の山の手方面を中心とした教養ある中流社会の若い人々が使用してゐる所のものである。」といった説明が見られる。

1. 日本放送協会『放送用語備要集成(第二部 発音・アクセント編)』(1942)

「ニュース用語調査委員会」(第2期放送用語委員会)において審議・決定された語彙を50音順にまとめた資料(『放送用語備要』)をもとに、これをさらに内容別にまとめなおして「発音・アクセント編」という分冊としたものである(謄写印刷、非売品)。およそ2,000項目が掲載されていると報告されている¹²⁾。これが第2分冊にあたり、第1分冊は「言換編」、第3分冊は「地名・人名編」である。

m. 金田一京助『明解国語辞典』(1943)

これは刊行が『日本語アクセント辞典』と同じ年で、発音・アクセント表示に関する相互の辞書どうしの影響はおそらくないものと考えられるが、参考までにここに記す。見坊豪紀が「編修並びに校正」を担当し、山田忠雄が「有効適切なる補助」をおこない、金田一春彦が「標準東京アクセント」を施した国語辞書である(『日本辞書辞典』(おうふう, 1996))。見出し語にアクセントを付けようというのは金田一春彦の発案で、ゲラが上がってから1つ1つ付していった。神保格の示すアクセントと異なるものを載せるときには、神保に叱られぬよう、たくさんの実例を集めたという。アクセント記号を傍線で示すのではなく、①②といったマル数字で表示するのも、金田一春彦の考えによる(金田一春彦(2001))。

IV 『日本語アクセント辞典』 編集関係者

これ以降、日本放送協会において『日本語

アクセント辞典』の編纂が具体的にどのような進められてきたのかについて考察する。その前段階として、編纂にかかわった人たちについて概観する（ただしここでは相当著名な人物にはあえて詳細な説明を施さない）。

まず、放送用語委員会として第1期に位置づけられる「放送用語並発音改善調査委員会」（1934.1～1940.3）の委員は、岡倉由三郎、保科孝一、神保格、土岐善麿、新村出、長谷川誠也、服部愿夫の7名である。このうち、アクセントの問題に特に積極的にかかわったのは、神保・土岐・新村の3名であると思われる。

また、第2期として位置づけられる「ニュース用語調査委員会」（1940.8～1945.6）の委員は、新村出、東条操、金田一京助、岸田国土、大岡保三、土岐善麿からなっており、ここでは新村・土岐に加えて東条がアクセントの問題に強くかかわっている。ただしこの「ニュース用語調査委員会」は、『日本語アクセント辞典』（1943）の編纂自体には直接的にかかわっていない。

加えて、協会側の事務局の役割が非常に大きかったものと筆者は推測している。わけでも、これまでもたびたび出てきた三宅武郎と佐藤孝という2名の人物が、アクセント辞典の原案作成に大きく関与したと思われる。

神保格

東京語を中心とする音声研究の分野を開拓した人物の1人である。

土岐善麿

歌人・国文学者。日本放送協会のアクセント辞典の編纂には1943年版と1951年版の両方にかかわっている。土岐のアクセント観としては、1つの単語に複数のアクセントが示

されることを嫌っていたようである¹³⁾。

新村出

音韻史の大家。『広辞苑』に連なる国語辞典である『辞苑』には編纂者と表示されているが、実際には溝江八男太が大半を執筆している（『日本語学研究事典』（2007、明治書院）の『辞苑』の項）。

東条操

方言学を体系的に形成した第一人者である。

三宅武郎

東京のアクセントに関して、1924（大正13）年から築地・日本橋・京橋の下町方言を中心に調査をおこなってカードに採集した。カードの枚数は1930（昭和5）年の時点で4万2,000枚に達したとのことである（三宅武郎（1934）（1938）¹⁴⁾）。日本放送協会で放送用語の仕事に当たっていたのは1933（昭和8）年から1943（昭和18）年の間であると推定される¹⁵⁾。

『日本語アクセント辞典』（1943）の序（新村出執筆）に、「本辞典の作成につきては、囑託三宅武郎氏其他の編纂係員及び放送員諸氏の少なからぬ努力を明記せねばならぬ」と特に実名をあげて明記されていることから、このアクセント辞典の作成にあたって中心的な役割をしたことがわかる。

佐藤孝

放送用語の調査に関して、三宅武郎が「兄弟のように一緒に仕事をした」と語る人物である（三宅武郎（1952））。東京帝国大学大学院在学中の1933（昭和8）年に、放送用語の調査研究を志望する履歴書を日本放送協会に提出し、翌1934（昭和9）年6月に臨時事務員として採用される。その後放送用語の調査

研究を続け、1943（昭和18）年10月に「放送局の用語調査の方も事実上やや行詰まりの状態なので」放送協会を退職し外国人向けの日本語辞典作成の仕事に就く（佐藤孝（1991）pp.108～115）。



「標準アクセント」に関する議論

前にも示したとおり、山田美妙が『日本大辞書』（1892～1893）を編纂した理由の一つに、大槻文彦『言海』（1889～1891）にアクセント表示がないことに関する不満があげられる。これに対して大槻は、その後の『広文典別記』（1897）において反論を示している。その趣旨は、山田の記したものは東京アクセントであってこれは「一地方のアクセント」にすぎず、日本語の概要を説明するのにあたってどのようなアクセントを掲載すべきなのかは議論が必要である、というものである。つまり、東京語のアクセントが標準語のアクセントである、といった即断はできないという姿勢の表れである。

また、かつてBK（大阪放送局）には聴取者から「なぜ東京アクセントで放送するのか」という投書があったことが伝えられている（東条操（1951）p.39）。「現在でも〔引用者注1938年〕京都の人達は、東京の大家の東京アクセント標準論の講演放送を聴きながら笑つてゐるさうである（S博士談）」という記録も残されている（三宅武郎（1938）、「S博士」とは^{しんむら}新村出のことか）。

アクセント辞典を編纂するのにあたって、そもそも「標準アクセントというのはいった

いどのようなものを指すのか」という議論が必要である。ここでは、当時なされた議論をめぐっていくつか紹介する。

まず、標準アクセントとして東京語のものを土台にするという意見が主流であった。たとえば神保格は、東京語のアクセントをひとまず採用するのが「合理的」であるという立場を取っている。そして、将来には各地のアクセントが混合して日本全体を平均したものができはらずであり、これが本当の「標準」である、という見解を示している。現代から見ると、現状をかなりの程度で正確に予測していたものと見てよいだろう。

「アクセントについて何を標準として統一するか。これは言葉遣ひと歩調を合せるのが合理的である。（中略）今日は東京に発達した一種の言葉遣ひが事実上標準と考へられ、国定教科書でも之を採用してゐるから全国の学校で此の種の言葉遣ひを標準として教へてゐる。然らばアクセントの方も同じく東京語に定まつてゐるものを標準として採用するのが合理的である。（中略）言葉遣ひが東京で、アクセントが大阪では、善くいへば公平かも知れないが、実は公平といふより不調和といふ感じの方が強く起る。（中略）勿論東京の言葉遣ひでもアクセントでも本質的に他より優れてゐるわけではない。大阪のアクセントでも東北のアクセントでも一般的にいへば悪くないのである。東京語のアクセントも或人々のいふ様に特別良いものでは無いが又同時に特別悪いものでもない。つまり何処の地方でも一般的には同じものである。同じであるといふなら、言葉遣ひの標準を東京語に求めた以上、アクセントも同じ東京語に求めるのは極めて自然の理ではないか。」

（神保格（1932.11））

「東京語といつても将来東京語ばかりが其の儘標準となるとは限らない。日本全国の標準となればそれは日本全国のものであつて東京といふ

一局部のものとは云へないのである。もつと具体的にいへば、将来各地のアクセントが多少混合して日本全体を平均した一種のアクセントが出来得るであらう。之がほんたうの標準的のものである。」

(神保格 (1932.12))

このように、神保の主張はあくまで実態主義に基づく「標準アクセント＝東京語アクセント」観であると言える。東条操 (1951) などと同様の主張であると言える。

また、三宅武郎・興水実 (1941) では、標準アクセントとして東京のものを採用することに異存がないこと、全国の3分の2の地域がおおむね東京式のアクセントであること、残りの3分の1の地域についても「幸にして、近畿地方は過去の文化的背景によつて自ら人の頭脳も鍛錬せられてゐるから、今後何十年かの間には、必ずや、よくこの困難を克服することができるであらう」と記されている。三宅武郎 (1941) においても、次に見るとおり「東京アクセント」を前提とした上で、その中でどのようなものを選ぶのが重要であると記述している。

「国語の標準アクセントが、東京アクセントの最も標準的なものを基礎として、これに若干の彫琢を容れる余地をのこしておくといふことには、今日、ほゞ国語界大勢が決してゐるとして、さてその東京アクセントの最も標準的なものを選定するといふことが、実は一仕事なのである。」

(三宅武郎 (1941))

このように、用語委員会の主要メンバーの1人である神保格や、日本放送協会側の事務方であった三宅武郎は、標準アクセントに東

京語のものを採るという線で一致しており、『日本語アクセント辞典』の編集にあたっては、大きな見解の違いはなかったものと思われる。

それに対して、石黒魯平 (1931) (1941)・柳田国男 (1941)・服部四郎 (1944.7) (1944.8) などは、東京語のアクセントを普及させる必要を必ずしも認めない主張として位置づけられる (稲垣正幸 (1951) p.768)。たとえば服部四郎 (1944.7) (1944.8) は、標準語 (音韻体系・アクセント体系も含む) は学者の理論的構築物ではなく現実の「東京語」を採用するのが適当であるという点において神保とほぼ同意見であると記した上で、日本語の場合アクセントを誤っても意味が通じないことはまれであることを考慮すべきであると主張している。

「[カメ] (亀) といふアクセント [引用者注 平板型] をきいて「死んでしまひたくになります」といつた東京の方もあるさうであり、(中略) この種の感情はできるだけ鈍くするやう努力すべきではないかと思ふ。東京人が、わかるけれども訛のある標準語的共通語を不愉快がつたり、腹立たしく思つたり、或は大阪人が東京アクセントをなまいきだとか浅薄だとか感じたりしてよいものであらうか。これは、日本人としての大同団結を幾分なりとも阻害する狭隘な感情ではなからうか。」

(服部四郎 (1944.8))¹⁶⁾

これに対して石黒魯平 (1931) の主張は東京語の必要性を認めないという点でこれよりも一歩進んでおり、アクセントを含めた標準というものは地域的にではなく社会的に位置づけるべきであるというものである。教養階級のアクセントを土台とし、これに人為的な

原則によって加工を試みようとするものであるが、この「階級アクセント」は結果的には現在一般に認められている「標準地域アクセント」と同じものになるであろうと説いている。また石黒魯平（1933）においては、日本共通語のアクセントは「大都市の流動社会の実際に従ふべき」であるという考えが示されている。伝統的な東京語ではなく、首都圏の流動層のことが実質的な共通語として認識されることの多い現代の言語状況を、うまく予測して言い当てているように筆者には思える。

このように、標準アクセントの認定に関して、戦前・戦中期においても学者の間での異なりがあった。そのような中で『日本語アクセント辞典』の冒頭に次のように掲げられているのは、当時の放送用語委員たちの間の総意として認められるであろう。

「放送アクセントは、所定の「放送用語の調査に関する一般方針」の示すところに従ひ、東京アクセントの最も標準的なものを採用することゝなつてゐるが、その選定に当つては、学問的にも実際的にも種々の困難が伏在してゐるといふことを率直に認めなければならない。」
 （『日本語アクセント辞典』（1943）の「例言」から）¹⁷⁾

VI 『日本語アクセント辞典』の編集過程 ～放送用語並発音改善調査委員会の審議に見る～

ここでは、『日本語アクセント辞典』（1943）が実際にどのように編集されたのかを、残された資料から概観してみる。

最初に、『日本語アクセント辞典』の冒頭

に掲げられた「例言」から本辞典の特徴を示す。

- アクセントの調査は、昭和12年度に開始した¹⁸⁾
- 審議にあつたのは、放送用語委員である服部愿夫・長谷川誠也・神保格・新村出・土岐善麿・保科孝一で、途中から特別委員として新村・神保・土岐の3名が選任された¹⁹⁾
- 語彙の収録は、新村出編『言苑』をもととして告知課員（アナウンサー）および用語調査係員が分担して選択し、それに若干の語彙を加えた²⁰⁾
- 原則として固有名詞・外来語は除いた²¹⁾
- アクセントを複数示す場合、最初に示したものが「第1アクセント」ということではなく、機械的に並べた（平板・頭高・中高・尾高の順）
- ここに掲載したアクセントに関する意見（年齢・生育地（本人および父母）を書き添えて放送用語係あてに）を読者から募集し、次回の改訂の参考にすることを表明

次に、放送用語委員会においてアクセントの問題がどのように取り扱われてきたのかを見てみる。

放送用語委員会の席上でアクセントの問題が初期に取り上げられたものとして、1934（昭和9）年5月25日（第8回）の議題があげられる。これは、今後アクセントにかかわる問題をどのように取り扱ってゆくべきであるかという指針を審議したものである。事務

表 放送用語委員会（第一期・第二期）におけるアクセント関連のおもな審議

回数	審議日	決定日	審議内容等
8	1934. 5/25	同左	調査に関する一般方針としてアクセントを取り上げ、その中で「アクセント付き放送用語辞典」の作成を明示
17	11/13		苗字の読み方およびアクセント 動詞のアクセント
25?	1935. 4/26	同左	アクセントの表記法について
46?	1936. 5/27	同左	「尊号及び年号の読例」アクセントについて
53	1936.12/11		アクセント付常用語句集(一)(二)(三)
?	1938. 2/24		アクセント表記法について
77	10/12		外国固有名詞及び外来語の発音に関する審議資料
78	10/29	同左	アクセント カの部(一)
78	10/29		アクセント審議上における用語の取極(案)
79	11/11		放送用語備要(一)
80	11/24	12/10	放送用語備要(二)
81	12/10	同左	放送用語備要(三)
82	1939. 1/11	同左	放送用語備要(四)
82・84	1/11・2/13	同左	アクセント キの部(一)
83	1/26	同左	放送用語備要(五)
83・85	1/26・2/25	同左	アクセント キの部(二)
85・86・87	2/25・3/11・3/25	同左	アクセント キの部(三)
88	4/11	同左	アクセント クの部(一)
89	?	4/27	アクセント クの部(二)
	?(4/27作成)		放送アクセント辞典(ア行の部)
	?(6/15作成)	?	アクセント ケの部
	?(6/25作成)		連語動詞のアクセント法則
	?(6/29作成)		基本動詞の名詞化アクセント法則・連語動詞の名詞化アクセント法則・対義連語動詞の名詞化アクセント法則
	?(6/29作成)		「かみなり」の類のアクセント表
	?(7/13作成)		基本動詞アクセント表(稿)
	?(7/26作成)		漢語動詞のアクセント法則
			[以上 第1期放送用語委員会]
	1941.11/13		疑問アクセント
	1942.10/10		(アクセント辞典まもなく発行との報告が用語委席上でなされる)
	1943. 4/13		『日本語アクセント辞典』及び『放送用語備要』(追補各号を含む)・『放送用語備要集成』の関係について
	1943. 7/13?		アクセント辞典の検討(一)(二)
	1945. 2/13	同左	(用語調査委員会にて決定せるアクセントと『日本語アクセント辞典』所載のアクセントとが異なる語彙五十一につきアクセントを審議)
			[以上 第2期放送用語委員会]

局側が提出した草案では、日本各地の方言アクセントの体系を明らかにすることも目標とされていたが、審議の結果、方言のアクセントについての言及はいっさいなくなってしまった(詳細は塩田雄大(2007.7)参照)。

同年11月13日(第17回)には、「苗字の読み方及アクセント表」と「動詞アクセント表」という資料が作成され提出されている。漢字表記の苗字についての読み方・アクセントと、基本的な動詞のアクセントを取り上げたもので、いずれも「ア」から始まる語のみがあげられている。「動詞アクセント表」の単語一覧表では、「アクセント表記法A」とし

てカギ式(アクセントの落ちるところにㇿを記す)が、「アクセント表記法B」として高く発音する部分のカナを太字で示すという方法が示されている。

なお、1935(昭和10)年4月に『宮廷敬語』が出されたが²²⁾、この資料の索引(「アオヤマゴㇿシヨ 青山御所」から「ワカミヤヒデㇿンカ 若宮妃殿下」までの約500語)には各語のアクセントがカギ式で示されている。

このあと、1936(昭和11)年12月11日(第53回)にアクセントの問題について個別の語について具体的に議論される。ここで提出された資料「アクセント付常用語句集(一)

(二) (三)は、次のような構成になっている。

(一)：「アイ 愛」から「アソン 朝臣」までの約450語のアクセント事務局案（カギ式表示ではなく『日本語アクセント辞典』（1943）と同様の直線式表示法）を示し、「アクセント辞典」（神保格・常深千里『国語発音アクセント辞典』（1932）のことを指すものと思われる）に掲載のある語についてはそのアクセントも付してある。NHK放送文化研究所に残っている資料では、この上に朱書きで『日本大辞書』（山田美妙のものを指す）のアクセントも追記されている。

(二)：「アダ 徒」から「アワレム 憐む」までの約250語のアクセント事務局案を示し、「アクセント辞典」と『日本大辞書』に掲載のある語はそのアクセントも付されている。

(三)：「アイキ 愛機」から「アヘンキューイン 阿片吸引」までの50語についてのアクセントが、事務局案として示されている。「アクセント辞典」と『日本大辞書』のアクセントが付されている語はきわめて少なく、「ニュース原稿三十六日分ヨリ採集」という注があることから、国語辞典類に載りにくい新語を集めたものと解釈できる。

この第53回の委員会の議事記録には、この資料の審議に関して以下のような記述が見られる。

「逐語審議三分ノ一を了す。その経過に鑑み、語彙の選択法とアクセント調査法とに関して協議。調査室作製の原案を委員に配布。委員閲覧の結果を調査室にて照合整理の上、アクセント相異のものだけを委員会に上程することとなる」

このあと、1937（昭和12）年には残された

資料で見るとかぎりアクセント関連の内容が提起されていない（この年の後半は皇室用語関連の議題が多い）。

1938（昭和13）年になると、アクセントに関する具体的な議論がなされるようになる²³。

2月24日には、神保格と三宅武郎とで協議した結果、アクセントの表示法として直線式を採用する旨が記されている。

10月12日には、外国の固有名詞（地名・人名・団体名が中心、一般名詞も若干含む）の発音・アクセント117語について、事務局の原案と、それに対する用語委員側の意見が各語ごとに委員の実名付き（一部は実名なし）で示されている。委員の名前には、神保格、土岐善麿、長谷川誠也、服部愿夫、保科孝一が見られる。いくつか抜き出してみると、次のようになっている。

【原案】	【原案に対する諸意見】
アルサスローレン	アルサスローレン(平) [神保]
アグレマン(×アグレマン)	アグレマン [神保・土岐]
ヴェネズエラ	ヴェネズエラ [神保]
カリフォルニア	カリフォルニア [土岐]
コスタリカ	コスタリカ(平) [服部]
テロリスト	テロリスト [神保]
ノルマンディー	ノルマンディー(平) [服部]
パリ(×パリー)	パリ [神保]
ハンガリー	ハンガリー [土岐・神保]
パラグワイ	パラグワイ [神保]
マネージャー	マネージャー [長谷川]
メイン・イヴェント	メイン・イヴェント [土岐]
モスクワ	モスクワ [神保]
ラトヴィア	ラトヴィア [神保]
ルフト・ハンザ	ルフト・ハンザ [土岐]

残された資料で見るとかぎり、委員の中でも神保格は外来語のアクセントに関して原語（英語・スペイン語など）のものを前面に出

すような提案をなしている。

10月29日には、「アクセント カの部(一)」として「カ 香」から「カンヌキ 門」までの138語(菅野謙(1984)で指摘)について各用語委員のアクセントが示された資料が提出されている。委員の名前には、神保格、土岐善麿、長谷川誠也、服部愿夫、新村出が見られる。いくつか抜き出してみると、次のようになっている。

海運	カイウン[土岐・服部・神保] カ̄イウン[神保・新村・長谷川]
開運	カイウン[土岐・長谷川] カ̄イウン[新村・神保・服部]
開花	カイカ [土岐・服部・長谷川] カ̄イカ [新村・神保]
外海	ガイカイ[土岐・新村・服部・長谷川・神保] ガ̄イカイ[神保]
海岸線	カイカ ^ン セン[土岐・新村・服部・神保] カ̄イカ ^ン セン[神保・長谷川]

菅野謙(1984)では、この138語のうち、その後『日本語アクセント辞典』(1943)に収録された129語について、それぞれの委員の回答の傾向を分析している。それによると、神保格および新村出は1つの単語に複数のアクセントを支持することが多く(神保は特に顕著)、現代アクセントとして普通に使われているアクセントは無理に1つにしぼらないという考えを持っていたこと、一方土岐善麿および長谷川誠也は標準アクセントとしてできるだけ1語1アクセントという方向を望んでいたと指摘されている。

また、その後『日本語アクセント辞典』(1943)に収録された129語168のアクセントには、このときに神保格の支持したアクセントが69.6%含まれており(母数は168のアクセント)

),これは5人の委員の中でもっとも高い割合であることが示されている。ただし、神保は1つの語に複数のアクセントを支持する傾向が強い。そこで、このときに各委員が提案したアクセントがその後『日本語アクセント辞典』(1943)にどの程度採用されたか、という計算(母数は各委員のそれぞれ提案したアクセントの数)をしてみると、各委員の中でもっとも高い割合になるのは土岐善麿の81.6%である。以上のことから、『日本語アクセント辞典』(1943)編纂にあたってのアクセントの決め方に関して、最終的なものを決定する資料・根拠となったのは神保格のもの占める部分が大きく、一方「しぼり方」(1語1アクセントを目指す)に関しては土岐善麿の考えにやや近くなっているのではないかと菅野謙(1984)は指摘している。神保の提示した諸アクセントを「材料」として、土岐の「姿勢」(=可及的「1語1アクセント」主義)を尊重しながら選定した、と言うことができよう。

また同日10月29日には、アクセントの審議にあたって用いる基本的な用語として「頭高」「平板」「中高」などといった言い方を採用することが審議されている。

11月からは、「放送用語備要」というものが提議・決定されている。これは、ことばの発音・アクセントを中心として、「語彙の範囲・問題の種類・及び順序を問はず、随時に審議決定して、当務者の参考に供せんとするもの」である。たとえば「放送用語備要(一)」の最初の部分には、「大」の付く語「大火山・大地震・大評判」などといったことばの読み方・アクセントが示されている。

1939(昭和14)年になって提議された「ア

クセント キの部 (一) (二) (三) (それぞれ97語, 84語, 139語掲載) は、「生糸 キイト キイト キイト」から始まっている。「カの部」と異なり、1つの語に複数のアクセントが示されているのみで、どの委員がどのアクセントを支持したのかが明示されていない(それ以降の「クの部 (二)」「(一)は散逸、(二)は72語掲載」「ケの部」(240語掲載)も同様)。おそらくこれは事務局側で作成した「たたき台」で、この資料をもとに当日の審議が進められたものと想像される。

同年のなかばごろに、「放送アクセント辞典(ア行の部)」という資料が作成される(4月27日作成・審議日未詳・謄写印刷、約1,000語掲載)。審議内容が付されていないので想像ではあるが、『日本語アクセント辞典』の仕上がりイメージを手書きで示したものであると思われる。

なお表中には示していないが、同年4月に日本放送協会『放送用語調査委員会決定語彙記録(一)』(1939)が刊行される(前述)。

同年6月に作成された「連語動詞のアクセント法則」は、複合動詞のアクセント形成について論じた資料である。複合動詞のアクセントは前項動詞のアクセント式に大きく左右されるという原則・傾向(山田美妙が最初に指摘)をめぐって、これに合致しない複合動詞を『日本語アクセント辞典』に掲載予定の語群(ア行のみ)から個別に引き出している。これに続く名詞化アクセント法則の資料および「[かみなり]類のアクセント表」(約600語掲載、四拍語における尾高型と中高型のゆれ(いわゆるA型とB型)を論じたもの²⁴⁾)も含め、内容的に見てこれらはおそらく三宅武郎の起案によるものと思われる。

同年7月に作成された「基本動詞アクセント表(稿)」は、単純動詞およびその名詞化形のアクセント型を示したものである(前述)。「漢語動詞のアクセント法則」は、漢語十スルの形の動詞について拍数別にアクセント型の傾向を示したうえで、これに合致しない少数例について論じたものである。

第一期の用語委員会として位置づけられる「放送用語並発音改善調査委員会」におけるアクセント関連の審議・決定は、ここまでである。これに関連して、1939(昭和14)年12月に発行された雑誌に載せられた「過去一ヶ年において放送用語調査委員会が疑問アクセントに就いて審議を了し得たる数が僅に四百語を出でなかつた」という三宅武郎(1939)の記述を指摘しておこう。

表にも示したとおり、『日本語アクセント辞典』(1943)発刊の下準備として、「クの部」までは用語委員会として審議された記録が残っており、また「ケの部」の資料も作成されている(これが審議されたかどうかは未詳)。それでは、これ以降はどのように審議・決定されたのだろうか。三宅武郎は、次のように語っている。

「ようやく他の仕事が一段落つきまして、いよいよアクセント辞典の編集ということになりましたので、ア行のアの部からはじめて委員とアナウンサーとの合同研究をはじめました。ところが急に第一期の事業をいちおう終了することになりましたので、カ行のクの部からわたくしが全部ひき受けて、まったく独自の責任でやりました。それで、各品詞別に語形成上からアクセント表をつくつたり、その他、全力をあげて編集したのでありますが、いちばん不幸であつたことは、この印刷を平版でやるべきところを、

輪転機にかけたために、アクセントの符号の線が墨つきがわるくて落ちたところが少なくなかったこととあります。」

三宅武郎 (1952)²⁵⁾

この記述によれば、当初はすべての掲載語について委員による審議・決定を施す予定であったが、途中から三宅武郎という一個人による作業に変更したこと、そしてそれは第一期の放送用語委員会である「放送用語並発音改善調査委員会」の突然の終了(1940(昭和15)年3月)決定によるものであることが推定できる²⁶⁾。

VII ニュース用語調査委員会 での議論

「放送用語並発音改善調査委員会」(第1期放送用語委員会)が終了したあと、1940(昭和15)年8月に「ニュース用語調査委員会」(第2期放送用語委員会)が発足した。『日本語アクセント辞典』(1943)に関する審議はこの新しい委員会ではおこなわれていないが、アクセントに関する話題は取り上げられている。たとえば1941(昭和16)年11月には、「疑問アクセント」として11のことばのアクセントが議題になっている。次のようなものが議題として残っており、記号の詳細な意味は明記されていないが、委員である東条操・金田一京助および協会嘱託の土岐善麿の意見を集約したものと解釈できる(最終的にどのように決定されたのかは未詳)²⁷⁾。

このあと、『日本語アクセント辞典』(1943)が1943(昭和18)年1月に発行される²⁸⁾。

疑問アクセント(1941.11/13議題)

	東条	土岐	金田一
愛好者	アイコーシャ		多,?(標)
	アイコーシャ	○	○ 稀,?.
経緯	イキサツ		少,?
	イキサツ	○	× 少,?.
	イキサツ		○ 多,?(標)
伊勢大神宮	イセ・ダイジングー		②× 多,新,(標)・
	イセ・ダイジングー	②	① 少,旧
	イセ・ダイジングー	①	
多い	オーイ		× 多,新,(標)
	オーイ	○	○ 多,旧,.
襲う	オソウ		× 少,旧,(標)
	オソウ	○	○ 多,新
様々	サマザマ		× 多,旧,(標)
	サマザマ		
	サマザマ	○	○ 少,新
焦点	ジョーテン		
	ジョーテン	○	○ 多,新,不可
譲歩	ジョーホ		① 多,旧,(標)
	ジョーホ	○	② 多,新
師走	シワス		○ 多,?(標)
	シワス	○	× 少,?
続々と	ゾクゾク		○ ② 少,新,(標)
	ゾクゾク		① 多,旧
代弁者	ダイベンシヤ		× 多,?(標)
	ダイベンシヤ	○	○ 少
	ダイベンシヤ		
			少,新

同年4月には、「『日本語アクセント辞典』及び『放送用語備要』(追補各号を含む)・『放送用語備要集成』の関係について」という議論が委員会の席上でなされている²⁹⁾。貴重な記録なので、ここにそのまま採録する。

今回刊行を見た『日本語アクセント辞典』及び従来の『放送用語備要』(追補各号を含む)・『放送用語備要集成』との関係については次の如く意見が一致した。

『日本語アクセント辞典』は前用語調査委員会（放送用語並発音改善調査委員会）に於て審議の上、三宅囑託がその編纂主任となり、一応刷成したものであるが、亦誤植なきを保し難い。

然るに、一方『放送用語備要』（同追補を含む）並に『放送用語備要集成』は、右『アクセント辞典』印刷校正進行中新規企画の下に現用語調査委員会の承認を経て、可動的な発音及びアクセントに対して特に指導性を持たせることに重点を置いて逐次編輯の上仮刷したものである。

従つて『アクセント辞典』と『用語備要』・『備要集成』との間には、その編輯方針並に時期その他の相違により、そのアクセント及び発音の表記に於て多少の齟齬を生ずるに至つたことは止むを得ない。

依つて之等多少の齟齬については、今後速かに調査の上後日再議に附し適宜の処置を講ずべきである。

つまり、基本的に第1期用語委員会のもとで作られた『日本語アクセント辞典』（1943）と、第2期用語委員会のもとで発行され続けた『放送用語備要』（1940（昭和15）年11月から1944（昭和19）年1月にかけて本編・分冊形式で継続発行）およびその進行途中で五十音順に再配列・整理のうえ発行された『放送用語備要集成』（発音・アクセント編は1942（昭和17）年1月発行）とでは、編集方針の違いなどから、認定された発音・アクセントに関してズレが見られることを明らかにしている。

その次回の1943（昭和18）年5月11日には、三宅武郎が「アクセント辞典の検討（一）（二）」という議案を作成し、土岐善麿が提案の説明をしたあと、各委員が次回までに校閲してくるようになった旨が記録されている。そして次の6月11日に、各委員の回答を整理のうえ

改めて審議することが記されている。

7月13日には、次のような記録がある。

『アクセント辞典』所載のアクセント再審議（承前）について。各委員の意見記入の表を比較するに、これもまた必ずしも一致するものばかりではない。由つて更に調査整理の上、なほ疑義の残るものを逐次審議のことに決定。次に『備要』に於けるアクセント採定方針のうち、その決定に幅を持たせるべき語について特に慎重を期することに意見一致した。

その後、記録によるかぎり、三宅武郎は1943（昭和18）年7月13日の回を最後として、また佐藤孝は同年10月13日の回を最後として、それ以降は会に参加していない。退職に関して佐藤は、先述のとおり「放送局の用語調査の方も事実上やや行詰まりの状態なので」（佐藤孝（1991）pp.108～115）と記している。

このあとニュース用語調査委員会においては、個別の語のアクセントについてはいくつか議論されたものの、『アクセント辞典』（1943）を対象にした議題は、しばらく見られない。1944（昭和19）年の年末から1945（昭和20）年の2月の間の回に（日付が特定できていない）、次のような記録がある。

同一の語彙について用語委員会で決定したアクセントと「日本語アクセント辞典」所載のアクセントと一致しない語彙が相当ある。かゝる語彙のアクセントはその何れによるも可であるが、一語について三種も四種もアクセントを認めることは妥当でないが、何種類かアクセントのある語彙についてはそのうち普通でないアクセントはこれを整理して行くことにした。その第一回の試みとして、左の語彙のアクセントは

次のアクセントのみを認めることになった。
(別紙)

[引用者注 「別紙」は散逸している]

また、その次の回(1945(昭和20)年2月13日)に、次のような記録がある。

前回に引続き、用語調査委員会にて決定せるアクセントと『日本語アクセント辞典』所載のアクセントとが異なる語彙五十一につきアクセントを審議、次の語は左のアクセントのみを認めることにした。

[以下 注30参照]

ここには51の語のアクセントが示されているが、ア行(ア～オ)のもののみで、今後継続的に審議・決定する予定であったらしいことをうかがわせる。戦争が末期に近づきつつあったことも関係があるのだろうか³¹⁾、その後これに続く形の審議は記録されていない。

VIII 本稿の暫定的なまとめ

本稿において、『日本語アクセント辞典』(1943)編纂の流れを、きわめて断片的にはあるが概観してみた。

ここまでの記述をまとめると、次のように言うことができる。

○昭和の初期には、アナウンサーは各地の放送局で個別に採用されており、発音・アクセント上での個人差が非常に大きかった。これに対して、ラジオ聴取者からの不満が寄せられていた。

○1934(昭和9)年以降は東京でアナウンサーを一括採用することになったが、アナウンサーを養成するための統一的な資料(アクセント辞典)の編纂が望まれた。

○「標準アクセント」としてどんなものを採用するかについては当時の社会でいろいろな意見があったが、日本放送協会の担当者の間では、実践的な立場から東京語のものを採用することではほぼ合意されていた。

○放送用語委員会におけるアクセント関連の調査・審議は1936(昭和11)年末から始まり、1938(昭和13)年に本格的におこなわれた。

○一語一語の審議・決定にあたっては、神保格の提示したアクセント案の占めた役割が大きく、また最終的な選定にあたっては「なるべく一語一アクセントを目指す」という土岐善麿の姿勢が活用されたと解釈できる。

○第1期放送用語委員会の終了に伴い、複数の委員による一語一語の審議・決定は「カ行」の途中までで中断してしまい、それ以降の部分は日本放送協会側の担当者である三宅武郎が独力で編集をおこなったと推測できる。

○『日本語アクセント辞典』(1943)は第1期の放送用語委員会の主導で編纂が始められたが、これが1943(昭和18)年に発行されたときには、第2期の放送用語委員会が活動をしており、双方の決めた発音・アクセントの間に行くつかの食い違いが見られた。

このあと戦後には、アクセント関連の再検討がおこなわれたのちに『日本語アクセント辞典』(1951)が発行される。

今回の稿では、『日本語アクセント辞典』(1943)の編纂の背景について記述したところが大部分を占め、具体的な一語一語についての言及はほとんどなされていない。今後はここに焦点を当て、たとえば編纂にあたって『日本大辞書』『国語発音アクセント辞典』『新辞海』などの記述内容がどの程度影響したのか、同一責任者の手による『新辞海』と『日本語アクセント辞典』(1943)との違いはどのようなものであるのか、といったことについて分析を進めてゆきたい。

(しおだ たけひろ)

注：

- 1) それぞれ『日刊ラヂオ新聞』1925.10/16および11/18から(塩田雄大(1999)からの再掲)。なお、かなづかいは原文のとおりとしたが、漢字の字体は議論に支障のない範囲内において現代の字体に直した。これ以降の引用も同様である。
- 2) この両資料における漢語・漢字語の読み方に関する投書の分析は、塩田雄大(2007.3)で取り上げたことがあるので参照されたい。
- 3) 「文字や符号を以て一般に表し得る発音の方面にはまだ〜問題がウンと沢山残つてゐる。その中で重要なのはアクセントの統一である。今日でも全国のアナウンサー諸氏のアクセントは大体に於て統一されてゐると思ふ。たゞ「大体において」であるから細かい所にはまだ調査改良の余地がある。例へば前に挙げた「午前、午後」といふ語はゴゼンかゴゼン(平板)か必しも放送の際一定されてゐない様である。それは世間で両方の型が同じ様に並び行れてゐるからである。その様な例は
「或は」 アルイワ — アルイワ

「殊に」 コトニ — コトニ
「最も」 モットモ — モットモ

等があり、又漢語には殊に多い、

世界 セカイ — セカイ

熱心 ネットシン — ネットシン

の類である。これらはその中どれか一つに定めればそれで良いのである。一体アクセントといふものは本来必然にどれが正しいとか誤りとかいふ定まりは無いのである。世間の慣用になつてゐるものが自然に標準となるので、標準が出来ればそれに合はないものが「誤り」となるのである。だから二種の慣用が同じ位に行はれてゐれば単にその一つを採るといふだけですむことになる。」(神保格(1936) p.18)

- 4) 「アクセントに就ても、アナウンサーたる人には正しく固定した標準のものがあるべき筈であるのに、まゝその流動性が見られ、例へば神保・常深両氏の『アクセント辞典』及び三宅武郎氏の『新辞海』にも表示されてゐない様な変型を耳にすることがある。以下、その変化形式の実例を、最近のアナウンス用語の内から拾つて見よう。括弧は前の場合と同様、[]は妥当と思はれるもの、(())は多少問題の存するものとに分けて示すことにする。

(一) 平板型が頭高型に変わるもの

「兎角」[トカク] → ((トカク))

「度膽」[ドキモ] → ((ドキモ))

「火炎」[カエン] → ((カエン))

「値段」[ネダン] → ((ネダン))

「毎時」[マイジ] → ((マイジ))

「毎夜」[マイヨ] → ((マイヨ))

「政治」[セイジ] → ((セイジ))

「葬儀」[ソーギ] → ((ソーギ))

「楮」[コーゾ] → ((コーゾ))

「釦」[ボタン] → ((ボタン))

「玉座」[ギョクザ] → ((ギョクザ))

「自粛」[ジシュク] → ((ジシュク))

「内閣」[ナイカク] → ((ナイカク))

「権益」[ケンエキ] → ((ケンエキ))

「海拔」[カイバツ] → ((カイバツ))

「平等」[ビョードー] → ((ビョードー))

「方丈さん」[ホージョーサン]
→ ((ホージョーサン))

(二) 平板型が中高型に変わるもの

「昨夜」[サクヤ] → ((サクヤ))
「有様」[アリサマ] → ((アリサマ))
「朝飯」[アサメシ] → ((アサメシ))
「落雷」[ラクライ] → ((ラクライ))

(三) 頭高型が平板型に変わるもの

「茅」[カヤ] → ((カヤ))
「以南」[イナン] → ((イナン))
「以北」[イホク] → ((イホク))
「事実」[ジジツ] → ((ジジツ))
「多く」[オーク] → ((オーク))
「県庁」[ケンチョー] → ((ケンチョー))
「自ら」[ミズカラ] → ((ミズカラ))
「精進」[ショージン] → ((ショージン))
「お月さん」[オツキサン]
→ ((オツキサン))

(四) 頭高型が中高型に変わるもの

「今晚」[コンバン] → ((コンバン))
「明日」[ミョーニチ] → ((ミョーニチ))

(五) 頭高型が尾高型に変わるもの

「雲」[クモ] → ((クモ))
「部落」[ブラク] → ((ブラク))
「漁夫の利」[ギョフノリ]
→ ((ギョフノリ))

(六) 尾高型が頭高型に変わるもの

「軸」[ジク] → ((ジク))
「萩」[ハギ] → ((ハギ))
「立場」[タチバ] → ((タチバ))
「強味」[ツヨミ] → ((ツヨミ))
「会議」[カイキ°] → ((カイキ°))
「好」[ヨシミ] → ((ヨシミ))

(七) 中高型が頭高型に変わるもの

「酔の物」[スノモノ] → ((スノモノ))

(八) 中高型が尾高型に変わるもの

「流言蜚語」[リュウケンヒコ°]
→ ((リュウケンヒコ°))

以上は極めて少数例に限ぎないし、(中略)之等の諸例を以て単なる音声事実として見るのが仮に許されるとするならば、大体に於て凡て頭高の型を採らうとする傾向が如何に多いか分らうと

思ふ。」

(佐藤孝(1941) pp.24~27)

「厳密な音声検査を経て採用された上、相当の期間訓練された放送員(アナウンサー)にしても、アクセントに関しては、間々我々と趣の異なるものを口にすることがある。例へば次の如き変異が発見される(下段はその変異を示す)。

折柄 [オリカラ] (中高)

— [オリカラ] (頭高)

堰 [セキ] (頭高)

— [セキ] (平板)

多年 [タネン] (平板)

— [タネン] (頭高)

中旬 [チュージュン] (平板)

— [チュージュン] (頭高)

名簿 [メイボ] (平板)

— [メイボ] (頭高)

毛頭 [モーター] (平板)

— [モーター] (頭高)

有力 [ユーリョク] (平板)

— [ユーリョク] (頭高)

寄付 [ヨリツキ] (平板)

— [ヨリツキ] (頭高)

陸路 [リクロ] (頭高)

— [リクロ] (中高)

以上は、本年五月から六月にかけての約一箇月に於ける放送員の用語について、実際に採集したものゝ一部であるが、之等のアクセント現象を通覧すると、どうも頭高化の傾向が多く見られる様である。この種の傾向はひとり放送員にのみあるのではなくて、一般世人の間にあつてもこの傾向があるのではないかと思ふ。つまりこの様なのが現代語に於ける一般アクセント変異の方向の一つであらうかと考へる。」

(佐藤孝(1942.12) pp.61~62)

5) 市川重一(1942)には自身の発音・アクセントが標準と異なっていた例としてこれ以外に50以上の単語項目が取り上げられている。

6) このことは、戦前にアナウンスを担当していた市川重一の以下の報告からわかる。

「当時、アナウンサーが常時使用していた、日本語のアクセントの資料は、次の三つであった。『国語発音アクセント辞典』…神保格・常深千里共著、厚生閣、昭和7年11月刊、市販。例言、アクセント解説、本文から成り、計526ページ。ガ行鼻音、母音の無声化も示している。アクセント解説はp.7～63にわたり、かなり詳しい。見出し総語数は約二万五千。

『新辞海』…吉沢義則編、三学社、昭和13年2月刊、市販。各語に簡単な解釈を付した、実用的な国語辞典。本文745ページ。各語にアクセントを示してある（アクセント担当は三宅武郎）。巻頭に「アクセントの話」（三宅氏執筆）を載せてある。見出し総語数は約五万。

『放送用語備要』…日本放送協会編、昭和15年11月刊、以後、「追補」を19年1月まで随時に続刊した。放送用語委員会では昭和9年以来審議した言葉について、言いかえ・発音・アクセントなどの決定事項を収録したものである。そのときどきの放送に出てきた言葉であって、地名・人名などの固有名詞も含まれていて、便利な資料であった。

昭和16～17年当時、放送の現場にいた筆者の経験から言うと、前の二つは編集したのが幾分古いせいも、日常、多用する語彙で収録されていない語が多かった。また、最後の『備要』は、資料としての性質上、語彙にかたよりがあった。」（市川重一（1984））

また、業務局告知課編『アナウンス読本』（1941）の参考図書として挙げられているものとしては、放送用語委員会で作成した資料群（『放送用語調査委員会決定語彙記録（一）（二）』『同音語類音語』『放送用語備要』含む）に加えて、「アクセント辞典」として以下の4点を挙げている。

1. 放送アクセント辞典（放送協会編、目下印刷中）
2. アクセント辞典（神保格・常深千里共著 厚生閣）
3. 新辞海（吉沢義則著、三学社版）
4. 全日本アクセントの諸相（平山輝男著、育英書院版）

7) ただし山田忠雄（1981）p.631でも示されてい

るとおり、『日本大辞書』には1つの語に複数のアクセントを掲げたものや、疑問符を付けて示したアクセントもある。

なお美妙の言語的背景については、次のような記述がある。

「美妙の父は南部藩出身（維新前に浪人して上京）であったが、母は江戸の町医者娘であり、美妙は神田に生まれて以来、父の赴任にも従わず下町を中心に育ち勉強していった。その点では、江戸生まれではあるが仙台藩で育ち、仙台へ行ったり江戸へ行ったりしていた大槻文彦よりも、アクセントに対して鋭い感覚を持っていたものと思われる。」（山田忠雄（1981）pp.628～629）

8) 「国語発音アクセント辞典」が厚生閣から出版になった。之は神戸の常深千里氏が20年間集めた東京アクセントで、本会創立間もなく常深氏の苦心を認めて、神保氏に囑してその完成を急いだもの。不幸にして発行の日を見ないで常深氏はなくなられた。之に關しての苦心やら不満足な点を、神保氏から細かに話されたが、ともかく日本最初のものであり、本会と縁の深いものであるからそのよく売れて、第二第三と改良された書物が出ることを祈つた次第である。」（『XXVIII回研究会記事』『音声学協会会報』29号（1933.5））

「先年、故常深氏が「アクセント辞典」の原稿を音声学協会に送つて寄越され、それと合流して出版したらどうかといふことを岡倉先生から学会の席上で懇懇されたときにも、お断りして神保氏の校閲を依頼したくらゐである。」（三宅武郎（1938））

「「アクセント辞典」は常深氏の原稿を神保氏が校閲せられたのであるから、妥協的なところがある。」（三宅武郎（1940））

なお、次のような記録もある。

「委員の一人である神保文理科大学教授にはアクセント辞典の名著があるが、放送協会のアクセント辞典が出来たならば廃棄してもよいとまで言はれてゐる。」（服部愿夫（1937））

また、神保は『国語読本の発音とアクセント』（尋常一学年～六学年）という全6巻の著作を1930（昭和5）年に出している。これは尋常小学校の国語読本の内容をすべてカナで発音表記した

うえでアクセントを付したものである。辞書形式ではないので本稿では紹介しなかったが、その後大きな影響を与えたものと思われる。

9) (昭和九年の)「五月ごろになり、大先輩兼恩師神保先生のご依頼により、先生の下職で平凡社『大百科事典』(引用者注『大辞典』の誤記か)の見出し語にアクセント表示の記号を添付するという仕事を仰せ付かり、新婚早々の女房にも手伝わせて原稿書きをしたら、月末には初めてのアルバイト料として謝礼金(金二十円也)を送って寄越してきた」(佐藤孝(1991) p.120)

また『大辞典』(平凡社)第二十六巻には、「主なる執筆者」の一人として「佐藤孝」の名前を挙げられており、後書きに相当する「大辞典完成に際して」には次のような文言が見られる。

「われわれが外国語の発音を知ってゐながらアクセントが違ふために、外国人に通じないことを思ふ時、日常用ひられる標準語にはアクセントをつけねばならぬ。寧ろ当然である。然るに従来の国語辞典にはこれがなかった。困難もあつたらうが、研究が発達してゐなかつた。われ等の大辞典は、つとめて新研究を漏らさず入れるやうにした一つの現れとしてアクセントを採入れ、その道の権威者神保格先生にお願ひして現代語約五万にアクセントを附して頂いた。国語辞典にアクセントを示したのは実に本大辞典を以て嚆矢であると云つても差支えないであらう。」(pp.3-4)

この『大辞典』(平凡社)のアクセントに対して、三宅武郎はあまり評価していない。

「国語辞書のアクセント表記に関する史的叙述の中で、平凡社の「大辞典」のことを書き落としてゐるが、同書のそれは、結局、神保・常深両氏の「アクセント辞典」の範囲を出でなかつたといふことである。」(三宅武郎(1938))

10) 「そのアクセントを引受けたことについて、現在なほ研究の途上にある私として、実は時期尚早であるといふことは十二分に心得てゐるつもりである。(中略)その私が一人の手でもつて、おほげなく国語辞書のアクセント表記を引受けることなど殆ど思ひもよらないところである。それにも

拘らず敢へて今度引受けたのは、旧著の「音声口語法」中「アクセント法」の部の序にも書いておいた通り、大正十三年以来コツコツと採集して来たアクセントカードの体系的分類を夜業で漸く終つたので、それをアイウエオ順に排列したものゝうちから、「新辞海」に所要の一部を割いて、それだけでも「一先づポケット用に纏めて見るといふ軽い気持ちで引受けてくれ」との依頼によつたのである(それを精神的に支持したものは故岡倉先生亡き後私のアクセント調査に関する知己を失つた悲しみである)。故に私としては、これから改めて全部を再検して見なければならぬ。結局、本書は私の第一稿であり、将来の「アクセント表示国語辞書」の捨て石である。といつて別に無責任なものでは決してない。無責任といへば、出版上の都合で是非にといふ請を容れて、校正を編輯部に一任したことについては大いに後悔している。(中略)吉沢博士の私に任ずるの篤き、「新辞海」の書名に「標準アクセント」の角書きを冠せられんとした。私は勿論固辞して「アクセント表記」又は「表示」とせられんことを請うたのである。(中略)「新辞海」の線は新しく組んだのではなく、前に大きく刷つてあつた写真原稿の上へ、別に印刷した線を、私のカードに照らし合はせながら一々切つて貼り付けたのださうである。それにしても長過ぎたり短か過ぎたりしてゐる(そのうへ写真撮影の工程中に剥落や直し違ひ等の錯誤が若干あつたといふのである)」(三宅武郎(1938))

11) 浅井真慧(1981) p.46には、この資料に関して「すべての語にアクセントが付けられている」と記されているが、これには若干の補足を要する。すべての語にアクセントが付けられているのは事実であるが、正式に決定されたもの(○印付き)と、アクセント表示はしてあるが決定には及ばなかつたもの(無印)とが混在している。

12) 菅野謙(1966) p.95の以下の記述による。

「[「ニュース用語委員会」で昭和15年11月から昭和16年8月までの10か月間に検討したアクセントは、およそ2,000項目である。]([放送用語備要集成(第2部発音アクセント編)])」

ただし、この言及が「この期間中に検討したアクセントの総数」に関するものなのか、あるいは『第二部 発音・アクセント編』に掲載された語数を指すものなのか、不明である。

13) たとえば次のような発言記録が残っている。

「(昭和) 26年にやったのなんかも、ぼくなんか加わっていて、どうもこれじゃ満足しない。自分には納得がいかないといったようなことがあったんで、わたしはアクセント辞典に土岐アクセントというものをひとつ出してみるからと言って、この本に全部“土岐アクセント”を付けて、渡したんですけども、それはなくしてしまったそうです。[改行] ことに戦後、アクセントについてゆれているといっても、ゆれていない一つのことばに二つなり三つなりアクセントがあるといっている場合もあると思うんですが…。とにかく、ゆれている度合いが非常に多くなってきて、そしてそのゆれているのをどこで決めるかというのは、大ぜいがこういうぐあいと言っているからといったような理由が一つ出される。「大ぜいが言っているから」ということが、必ずしも日本語の本来のアクセントじゃないんじゃないか。もとのところを知らないために、大ぜいがそういうぐあいに言うようになってきた。それを認めていいかどうか。」(用語研究班 (1964))。

14) 三宅の手もとには1937(昭和12)年には常用語約5万枚のアクセントカードができあがっているという記録もある(服部愿夫(1937))。また、山田美妙『日本大辞書』の全語彙をカード化している(三宅武郎(1969))。なお、以下のとおり『日本語アクセント辞典』(1943)の「責任者」を自任していたような記述もある。

「ことにアクセント辞典は、その序文にも書いてありますような組織と経過でできたものであります。今日としては最高のものであると思います。[改行] これで前に申しました初版の責任者であるわたくしも実に肩の重荷をおろしたような感じてうれしくてなりません。[原文のとおり]」(三宅武郎(1952))

15) ただし、三宅自身の記述として「NHKの放送用語の調査に私が関係したのは七年あまり」(三宅武郎(1952))というものもあり、確定できない。なお、三宅は日本放送協会勤務後に文部省調査局国語課員となり、1983(昭和58)年に死去した(市川重一(1984))。

16) ここに引用した内容は現代の日本人が読んでも違和感を覚えない。一方、次のような記述については、「方言はそう簡単にはなくなる」という予測は当たっているものの、「方言がなくなるのが理想である」という主張の点に関して、当時の社会・時代背景を感じさせる。

「日本国民たる者が一人残らず、音韻・文法・語彙の点で完全に同じ言語を用ゐるやうになり、従つて、方言が絶滅して了ふのが理想であることはいふまでもない。(中略) 併し、実際問題として見れば、さういふ理想の実現される可能性は極めて少く、少くとも今後数百年のうちに実現されないことは確実である。」(服部四郎(1944.7))

「我々は標準語の徹底的な普及、方言の絶滅を理想として、あらゆる努力をすべきであるが、こゝ数百年の内に、日本全国の方言が絶滅しようとは到底考へられないから、各地の人々の話す標準語的共通語の発音やアクセントの地方的な訛も数百年の内に消滅しようとは考へられない。」(服部四郎(1944.8))

17) 文中の「所定の「放送用語の調査に関する一般方針」の示すところ」に該当するのは、以下の記述である(詳しくは塩田雄大(2007.7)参照)。

「三. 共通用語は、現代の国語の大勢に順応して、大体、帝都の教養ある社会層において普通に用ひられる語彙・語法・発音・アクセント(イントネーションを含む)を基本とする。」

なお、この「一般方針」の当初案起草者に関して、塩田雄大(2007.7)では「事務局側の三宅武郎が、主査の岡倉由三郎の意を大きくくみ取るような形で書き上げた」ものなのではないかと推定したが、これが事実であるらしいことが、以下の記述から読みとれる。

「私は、真に「御杖代」の心持で、昭和九年一月

から満五ヶ月の間、先生御指導のもとに『放送用語の調査に関する一般方針』の原案起草に従事した。私は永久に、この五ヶ月間における先生と私、親子二人きりの楽しかつた生活を胸に抱いて墓場まで行くつもりである。」(三宅武郎(1937),「私」は三宅,「先生」は岡倉のことを指す)

18) ただし浅井真慧(1989)も指摘しているとおり、放送用語委員会の議事録を調べてみると、「アクセント付常用語句集」という資料の作成と検討が1936(昭和11)年12月からすでに始められている。

19) 原文では「中途より特別委員として新村・神保・土岐の三氏が選任せられた」となっている。この「中途より」については、浅井真慧(1997)では「(昭和)14年の11月以降」とであると記述されている。また、浅井真慧(1981)には「記録によれば、14年6月の「ケ」の部の審議を最後に、委員会での逐語審議は一応終了し、特別委員として選任された新村出、神保格、土岐善麿の3氏により検討が続けられた」という記述があるが、「ケ」以降が本当に特別委員によって検討されたかどうか、後述するとおり再検討してみる余地がある。

20) 新村出編『言苑』(1938)の特徴としては、前書きにあたる部分に「本辞書の包含する所は、普く中等学校・青年学校・小学校における国語科を始め各科の教科書中の主要語にわたるを以て、学習上の効果価値は、これに由つて大に高まるべきことを信じて疑はない。之に加ふるに、現代語・新造語・最新外来語等須要なる語彙の採択に努めたばかりでなく、殊に最近皇軍武威の発揚と国力の海外発展とに基く語彙の成果を、本書の中に成るべく多く蒐集することを期した。軍事用語の豊富なるが如きは、その顕著な一例である。」(「序文」)という記述がある。また編集に関しては、「収むる所の語彙凡そ十萬、語彙選択の当否、説明の確否については、編纂主任溝江八男太氏予を輔けて之に当り、森松興造氏はその得意とする「同訓異義」の立案・工作及び全般的検討並びに校正に終始その力を致し」(「跋」)と記されている。

21) 戦前・戦中の放送における外来語の取り扱いについては、塩田雄大(2007.6)参照。また、外来語のアクセントについて原語式に発音する必要のないことが佐藤孝(1942.3)に示されている。

22) 日本放送協会発行。冒頭に「本稿は宮内庁当局其他に就きて質したる上更に放送用語並発音改善調査委員会の審議を経たるものなり」と記されている。なお西谷博信(1965)にも示されているとおり、NHK放送文化研究所に保存されているものは1936年8月に発行された再刷物(活版印刷、内容の改定なし)で、1935年4月刊行の初版は謄写印刷であったと思われる。

23) なお、三宅武郎は次のような「私案」を1938(昭和13)年5月に雑誌『国語運動』誌上で披露している。

「アクセント辞典の編纂方法に関する私案

一. アクセント調査委員会を設ける。

委員を顧問委員と常任委員とに分ける。

顧問委員には各方面の専門家と老大家を委嘱する。

別に方面委員(後述)を依嘱する。

一. アクセント辞典編纂の「基本第一稿」として吉沢博士の「新辞海」を使用する。

因みに、先づ「新辞海」を用ゐるといふのは文化資源の総動員的精神に依るものである。私のカード(及び調査表)の全部を提供しやうといふのも同じ心持であり、各所で繰返す無用の労力と時間とを極度に節約しやうといふだけのことである。

一. 常任委員は「新辞海」を通閲して、自己の異見を記入して返送する。

一. 常任委員に異見なきものは、一先づ第一版の決定アクセントと認めてこれを印刷の方へ廻す。

一. 常任委員に異見あるものを摘録して「疑問アクセント表」を作る。

一. 右「疑問アクセント表」には、各委員のアクセントと共に、山田の「日本大辞書」と神保・常深両氏の「アクセント辞典」とのアクセントを並記する。

一、疑問アクセントを審議するために参考として必要な体系的調査表を作る。

アクセント辞典といへば直ぐにアイウエオ順で行かう、問題があれば数人の談合で決めやうといふのが、およそ始めて事に当る人の定石的な考へ方であるらしいが、実は、それで行くものと、それでは行かないもののがあつて、それで行かないものは、最後のワ行までいつて始めてア行の一語の問題が解決するのである。即ち全体が一部を規定するのである。そのとき必要なのが即ち体系的調査表である。

一、別に現在の小学・中学・女学校等の生徒達のアクセント傾向を随時に調査するため、下町・山ノ手の数区内に互つて適当と認める学校当局と予め連絡をとりその調査責任者を方面委員として依頼しておく。

なお別に適当と認める家庭を選んで、必要に応じ随時にアクセントの問合せに応ずる「アクセント資源の家」又は「人」を設定しておく。

右二者による調査資料をも審議上の参考に供する。

一、かくて顧問委員と常任委員との総会を開き、疑問のアクセントについて逐語的に審議し、これを適当に処理する。

一、一方、「新辞海」中の不用の語を消すと共に、それにない必要な語を補充する。それには先づ新村博士の「辞苑」を使用する。それは同書の内容が良いばかりでなく、語の排列順が同じであるから照合に便宜である。

右の語彙の選択は広い方がよい。私は網羅主義である。勿論、始めから多きを望まないが、いろいろな立場から、それぞれの範囲を狭く限定することは、結局は二度手間である。

一、さて右の増補語彙にアクセントを表記し、即ち「増補第一稿」のプリントを作る。

一、以下、前の「基本第一項」に準じて処理する。」

(三宅武郎 (1938))

この三宅の「私案」が『日本語アクセント辞典』(1943)の編纂にあたってどの程度実行されたのかは、今後の課題としたい。

24) A型B型という呼称は、三宅武郎が名づけたも

のである(「このことはずつと以前大正七、八年ごろ文部省の国語調査室でアクセント調査をしたときに、神保、東條、佐久間の諸先輩によつて発見されたもので、わたくしはこれをA型、B型と名づけているのです」(三宅武郎 (1952))。

たとえば「かみなり」のアクセントとして[カミナリ](尾高型)とするのがA型、[カミナリ](中高型)とするのがB型である。ここで掲げた審議資料には、東条操と土岐善麿がA型の系統、神保格と服部愿夫がB型の系統であるという記述がある。三宅は、「かみなり」と同じ語形成を持つ語が、日本語の中で約千百余語ある」と指摘している(三宅武郎 (1939))。

25) ここで三宅は「クの部から」独自に引き受けたと記しているが、残された議事録によるかぎり、少なくともクの部までは公的に審議・決定されたことになっている。三宅の語るとおりクからは審議はしなかったものなのか、あるいは三宅の誤記(クとケの)もしくは記憶違いによるものなのか、判然としない。

26) 『日本語アクセント辞典』(1943)の編纂にあたって、1940(昭和15)年以降も、委員の1人である土岐善麿が関与をしたことは事実であるようである。

「同委員会[引用者注 放送用語並発音改善調査委員会のことを指す]は、昭和十五年をもつて一応所期の目的を達したのであるが、引続き土岐善麿氏は当協会囑託として現任し、用語調査の事に当ると共に本書の編纂についても指導に当つた。」(『日本語アクセント辞典』(1943)の「例言」から)

ただし、その関与の度合いがどの程度であったのかは不明である。本稿の筆者は、少なくともアクセント決定の最終段階には土岐はそれほど関与しなかったのではないかと推定している。以下の二点が、そのことを裏打ちする。

○戦後の『日本語アクセント辞典』(1951)についての言及ではあるが、土岐はNHKのアクセント辞典の記述内容に満足していなかったこと(注13で既述)

○『日本語アクセント辞典』(1943)の編纂に当

たって、三宅武郎(1952)で「A型だけを認めてB型を排する有力な委員の強い勧告をしりぞけて、その二つ[引用者注 A型とB型の両方のこと]をおいた」と記されていること(この「有力な委員」とは、おそらく土岐のことを指すものと筆者は想像している)

27) 先述のとおり金田一京助『明解国語辞典』(1943)の「標準東京アクセント」を付けたのは子の金田一春彦であることから考えると、この資料で「金田一」となっているところは、あるいは金田一春彦の示したアクセントである可能性も高い。なおNHK放送文化研究所に残っているこの議題資料には、万年筆書きで「東条 土岐 金田一」と書かれたところに、青鉛筆書きで取消線が付されたうえ「A B C」と追記されている。おそらくこの原稿をもとにして何らかの活字印刷版が作られたものと思われるが、そこには委員の個人名は明記されなかったのであろう。

28) 『日本語アクセント辞典』(1943)には「大日本アクセント分布図」という図が載せられており、これは修正を施しつつ現代の『NHK日本語発音アクセント辞典』(1998)にも載せられている。このアクセント図は、もともと製本所の手違いによってこのアクセント辞典に収録されたことが、三宅武郎(1952)で明らかにされている。

「さてこの、日本語アクセント辞典(昭和十八年刊)の巻頭に、日本全国のアクセント分布図がついています。これは平山(輝男)さんの作図でありまして、同氏が全国を行脚して実際に臨地調査された研究の結晶であります。それがこの辞典に載りましたのは、実は全く偶然のことでありまして、神田の製本所で、この辞典の製本と、平山さんのほうの製本とがかち合つてそれを製本所のかんちがいからこちらへもつけたのであります。それを製本後に発見したときには実に驚きました。だんだん筋をたどつて調べてみると右のようなことでありましたので、当局とも委員方とも平山さんとも協議した結果、その簡単な解説にあわせて「平山輝男氏の調査によるものである」ということを印刷したものをつけたのであります、その

ときすでに発行元から販売のほうへまわつたものがあつたということで、ついにそのことを知らない人もあるようですから、いろいろな機会にもいふことですが、ちようどこの機会にも明らかにしておきたいと思います。」(三宅武郎(1952))

この取り違えのもととなった平山輝男の著書は、出版時期から考えても、おそらく日本方言学会編『国語アクセントの話』(1943, 春陽堂書店)であると思われる。同書に載せられたアクセント分布図は、筆者が見るかぎり非常によく似ている(あるいはほぼ同一である)。

29) なお同日(1943.4/13)には、放送協会において4月以降「ニュース」の呼称を改め「報道」としたことが用語委席上で報告されている。「敵性語」を言い換える動きの1つである。

30) 以下のように掲載されている。

音信不通	インシンフツ
歌人	ウタヨミ ウタヨミ
打つて変つて	ウツテカワツテ
入り乱れる	イリミダレル
居残る	イノコル
稲作	イナサク
偽り	イツワリ イツワリ
育児法	イクジホー
育児	イクジ
餌	エサ
追風	オイカゼ オイカゼ
皇子	オージ
襲う	オソウ
音沙汰	オトサタ
倅	オモカケ° オモカケ°

次の諸語は両方のアクセントを認める

家毎に	イエゴトニ イエゴトニ
いきさつ	イキサツ イキサツ
行き着く	イクツク イクツク
初産	ウイザン ウイザン
撃ち落す	ウチオトス ウチオトス
打碎く	ウチクダク ウチクダク
所謂	イワユル イワユル
謂はば	イワバ イワバ

一に	イツニ イツニ
一文字	イチモンジ イチモンジ
一月	イチカ [°] ツ イチカ [°] ツ
幾つも	イクツモ イクツモ
いくら	イクラ イクラ
幾重にも	イクエニモ イクエニモ
疫痢	エキリ エキリ
絵踏み	エブミ エブミ
選び出す	エラビダス エラビダス
奥義	オーキ [°] オーキ [°]
大御稜威	オーミイツ オーミイツ
補ひ	オキ [°] ナイ オキ [°] ナイ
奥地	オクチ オクチ
雄叫び	オタケビ オタケビ
おちおち	オチオチ オチオチ
落葉	オチバ オチバ
衰へ	オトロエ オトロエ
御内儀	オナイキ [°] オナイキ [°]
尾根	オネ オネ
思ひ	オモイ オモイ
思ひ当る	オモイアタル オモイアタル
思起す	オモイオコス オモイオコス オモイオコス
思ひがけなく	オモイカ [°] ケナク オモイカ [°] ケナク
思出す	オモイダス オモイダス
面長	オモナカ [°] オモナカ [°]
思惑	オモワク オモワク
泳切る	オヨキ [°] キル オヨキ [°] キル オヨキ [°] キル

31) 戦中最後のニュース用語調査委員会は、次に掲げるとおり「沖縄の地名の審議の提案」で終わっている。沖縄の状況を報道せざるをえなくなった当時の戦局をしのばせる。

「最近戦局ノ進展ニ伴ヒ報道中ニ難読ノ沖縄地名ガ相次イテ現ハルルモ町村名以外ニ就テハ未ダソノ読方ヲ調査シタルコトナクコノ際字名、島名ヲ含ム約六百ノ地名ノ読方ヲ調査シテ置クコトノ必要ヲ認メ沖縄出身ノ地理学者仲原善忠氏（成城高等学校教授）ニソノ読方ノ調査ヲ依頼スルコトニ決定」

（ニュース用語調査委員会1945.5/12議題）

引用文献

- 浅井真慧（1981）「放送のことばのあゆみ（1）～放送用語調査研究資料解題～」『文研月報』第31巻9号
- 浅井真慧（1989）「放送用語の調査研究の変遷～耳のコトバの確立まで」『NHK放送文化調査研究年報』34
- 浅井真慧（1997）「放送と「発音のゆれ」」『NHK放送文化調査研究年報』42
- 石黒修（1939）「特に話す言葉の上において（標準日本語の理想的要件）」『放送』第九巻第十号
- 石黒魯平（1931）「アクセント研究法に関する一提案」『音声学協会会報』第22号
- 石黒魯平（1933）「ラヂオ言語学建設の議」『調査時報』第三巻第十九号
- 石黒魯平（1941）「アクセントとイントネーションに就て」『日本語』第一巻第六号
- 市川重一（1942）「アナウンサーと国語」『現代日本語の研究』
- 市川重一（1984）「放送用語史論（その2）」『千葉経済短期大学初等教育科研究紀要』第7号
- 稲垣正幸（1951）「国語アクセントの研究概観」『国語アクセント論叢』
- 菅野謙（1966）「放送用語研究の一方法」『NHK放送文化研究年報』第11集
- 菅野謙（1979）「放送での「発音のゆれ」45年」『NHK放送文化研究年報』24
- 菅野謙（1984）「アナウンサーのアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』
- 金田一春彦（2001）『明解国語辞典』『三省堂国語辞典』と私』『明解物語』
- 佐藤孝（1936）「放送用語の問題」『言語問題』第2巻第5号
- 佐藤孝（1941）「放送用語発音規準の問題」『コトバ』第三巻第一号
- 佐藤孝（1942.3）「外来語のアクセント」『国語運動』第六巻第三号
- 佐藤孝（1942.12）「現代語と放送用語」『国語文化』第二巻第十三号（十二月号）

- 佐藤孝 (1991) 『ことのはつれづれぐさ—自伝的駄弁録—』 講談社出版サービスセンター
- 塩田雄大 (1999) 「東京発のテレビ番組の中の方言」『日本語学』第十八卷第十三号 (1999年11月臨時増刊号)
- 塩田雄大 (2007.3) 「漢語の読み方はどのように決められてきたか 戦前の放送用語委員会における議論の輪郭」『NHK放送文化研究所年報2007』第51集
- 塩田雄大 (2007.6) 「放送における外来語—その「管理基準」の変遷」『言語』vol.36 No.6
- 塩田雄大 (2007.7) 「最初の放送用語基準～1935年『放送用語の調査に関する一般方針』作成の背景～」『放送研究と調査』第57巻第7号
- 神保格 (1932.11) 「言葉の統一とアクセントの問題 [一]」『調査時報』第二卷第二十二号
- 神保格 (1932.12) 「言葉の統一とアクセントの問題 [二]」『調査時報』第二卷第二十三号
- 神保格 (1936) 「アナウンスと其の用語」『放送』第六卷第四号
- 総務局計画部 (1935) 「放送の言葉に関する事項投書調査」『放送』第五卷第五号
- 総務局計画部 (1936) 「投書内容調査 (第一次報告) 「放送の言葉」に関する事項」『放送』第六卷第十号 (11月号)
- 東条操 (1951) 「アクセント教育の問題」『国語アクセント論叢』
- 土岐善麿 (1931) 「勝手なこと二三」『調査時報』Vol.1 No.6
- 西谷博信 (1965) 「放送用語研究史要—NHKで編集した放送用語関係資料を中心として—」『NHK放送文化研究年報』第10集
- 日本放送協会放送史編修室 (1965) 『日本放送史上巻』
- 服部四郎 (1944.7) 「標準語とアクセント」『日本語』第四卷第七号
- 服部四郎 (1944.8) 「標準語とアクセント (承前)」『日本語』第四卷第八号
- 服部愿夫 (1937) 「最近の放送用語発音調査」『放送』第七卷第七号
- 三宅武郎 (1934) 『音声口語法 (国語科学講座Ⅵ国語法)』 明治書院
- 三宅武郎 (1937) 「先生と私」『言語問題』第3卷第3号 (岡倉先生追悼号)
- 三宅武郎 (1938) 「国語辞書のアクセント表記について 標準アクセント辞典の編纂方法に関する私案」『国語運動』第二卷第五号
- 三宅武郎 (1939) 「放送アクセント選定上の一問題」『放送』第9卷第12号
- 三宅武郎 (1940) 「アクセントについて」『標準語と国語教育』 岩波書店
- 三宅武郎 (1941) 「標準アクセント選定上の手続について」『コトバ』第三卷第一号
- 三宅武郎 (1952) 「ラジオ用語研究の過去・現在・将来」『商業放送講座』
- 三宅武郎 (1969) 「山田美妙のアクセント観」『国語講座 第1巻』
- 三宅武郎・興水実 (1941) 『国民学校アクセント教本 一学年用』 国語文化研究所
- 米良忠麿 (1932) 「絃上の音」『調査時報』第二卷第十五号
- 柳田国男 (1941) 「標準語について」『方言研究』三集
- 山田忠雄 (1981) 『近代国語辞書の歩み—その模倣と創意と— 上』 三省堂
- 用語研究班 (1964) 「座談会「日本語のアクセント」」『文研月報』第十四卷第二号